



幸若舞曲百合若大臣覚書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 溪水社 公開日: 2012-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白石, 一美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/3852

幸若舞曲百合若大臣覚書

白 石 一 美

はじめに

幸若舞曲百合若大臣（以下舞と略）については、福田 晃氏に諏訪本地との比較による諏訪原態追及の論¹があり、「山鹿物語」と舞曲「信太」「百合若大臣」と題する、物語内容を32の構成単位に細分・分析された小林健二氏の室町中期における三者共通の語り基盤を²想定²の論あり、一・二、注釈書の刊行もなされ、研究が進んでいる。私は、概ね舞の物語展開に即して、注釈書に未詳とする箇所³の調査をも含めて舞の特徴その他について考察するが、基礎的調査ゆえここに覚書として誌しておきたい。

舞の引用本文は笹野 堅編『幸若舞曲集』（大頭左兵衛本『大臣』五一〜七二頁³）に拠るが、引用を最少限に止め、次に掲げる比較資料を利用していただいた。予めここに記して御礼申し上げる。

小玉正任著『史料が語る琉球と沖繩』⁴所収の宮古郡水納島の百合若伝承・諸文献（雍正旧記ほか）

武田静澄文「百合若」⁵（全一頁の短文 固有名詞から九州地方の伝承に拠ると思われる。武田文と略す。）

荒木良雄著『安土桃山時代文学史』⁶第11章『百合若大臣』成立考（説経の筋の要約に使用させて戴いた。）

松岡利夫編『周防長門の伝説』⁷所収『城山くずれ』（全12段構成の琵琶歌 長州藩の地神盲僧の語り物）

一、申し子誕生より結婚に至るまで

舞の粗い構造は、冒頭祝言部・世に波風あり百合若これを鎮める物語部・末尾祝言部の三段構造と判断する。

冒頭部は「ある左大臣に子無く、初瀬観音に参詣・申し子。男子誕生、百合若と命名。袴召（7歳）・初冠（13）・右大臣（17）、三条壬生の大納言の姫を迎える」に至る平穩な人生を四百字未満に短く語る。

壹岐にイチジョー百合若説経があり、申し子誕生が説経の第3、婚礼が第6段目に現れて、誕生結婚までが長い。1内裏建の段 万の宝の万の長者と、位は高いが宝の無い朝日長者の宝競べに始まり、負けを予想した朝日が内裏で嘆くと安堵せよ云々。（家内安全息災延命諸願成就の誦文に第1段を語り了る。誦文は他の段末にもあり）

2宝競べの段 万長者は数の宝を、朝日長者は僅かな宝を出す。人々は勝負にならぬと笑う。朝日の12人の子が現れて稚児舞を始めると、人々はこれこそ宝よと褒め、宝競べは朝日の勝ちとなる。

3申し子の段 負けた万長者は清水観音に祈り、申し子誕生、百合若と命名。（次の4御山人の段で7歳鞍馬入山す）

万の長者が、宝は多く持っているが、子を持たないがゆえに勝を朝日の長者に譲ったのは、よいとして、その長者が、清水観世音に申し子をして、その利生で百合若が生まれ、結局、万の長者が勝つという筋は、すっきりしない。それは添加された二重構想の矛盾であって、説経節の『愛護の若』と同様の紛れであり、贅疣とすべきであろう。（荒木氏のコメント四七九頁）しかし、説経のそれは後述の如く必ずしもムダではないと思う。）

次に紹介する説経の類話、琵琶歌『城山くずれ』においてはヒロイン万寿姫の結婚が末尾近くに現れる。

厚東城主盛俊に子供無く、ある時、家老包村に宝較べを提案。盛俊は数の宝を、包村は12人の子を出す。

負けた盛俊は子授け観音中山寺に参る。満願の告げに「女子を授けるが、命は八歳までぞ」と。誕生、万寿と命名して姫を大事に育む。観音も昼夜にこれを譲る。

姫は八歳以上に成長の趣きあり、かねて盛俊に叛意ある包村は中山寺にて嘘つき観音云々。程なく盛俊没。

母子は包村に囚われる。厚東の旧臣、越後直江浦の商人が包村を欺いて母御前を越後に救出。残る万寿には辛い日が続く。窮地に臨んで観音の加護あり、越後に脱出、母子再会。ここに都の八幡太郎義家に「直江にて妻求めせよ」との中山観音の告げあり、姫は義家に見出されて北の方となり、義家は包村を討ち取った。

琵琶歌は「困難に耐え、観音を信じて開運を待て。八歳の命が今に及ぶのも観音のお陰ぞ」との説教色が濃い。その構造は、山椒大夫風の辛苦を経て敵討に結ぶが、要するにシンデレラ型に宝競申し子譚を前置した構造である。話を単純化し、前を削り、包村を継母に変更すれば、子供向の話となる。これを大人に語れば幼時に聴いたと失笑される。琵琶歌は周知の話をもとに霊験本位にこれを脚色改作したかと思われ、子宝祈願・育児延命・成長結婚など人生折々の実利的な現世利益面が見え、祈願者の要求と僧侶の生計面とを考慮する必要がある。

二、申し子譚の発生と宗教その他の問題

古く日本霊異記・今昔物語集・『観音利益集』などに悪疾貧困等々の現世の悩みを霊験交りに載せる。説経や琵琶歌の子宝もその一つである。その霊験部分を切捨てれば、申し子なる単語が言わばトカゲの尻尾として残る。

説経などは誕生までの語りが難儀だが、爺婆に子が無くて住吉に申し子して一寸法師誕生と語る草子は、背丈以前述現世の悩みが一寸残るが、その尻尾から始まる。舞もまた一寸法師同様ほぼゼロである。これは興味を未生以前に置か誕生後に置くかの相異であり、琵琶歌などの重点は子供であり、その子は世間並で十分である。後者は

突如誕生の超児童であり、興味は必然的に成長後の事業に移る。これが御伽草子に通う前述の悩みを脱却・純化した申し子譚の発生かと思う。言わばトカゲの尻尾切りであり、尻尾から舞や草子の物語が始まるのである。

説経や琵琶歌から物語性を弱くすれば、宗教的要素が濃厚となる。謡曲『小林』（冒頭にゴゼが石清水八幡の回廊で山名陸奥守氏清の戦死を謡い早歌とし、現今の事件ゆえ歌うなど男の制止あり）の作品末尾に山名陸奥守氏清や小林の霊をアズサミコが梓弓にかけて口寄せする条がある。神子はこんな詞で寄せるのである。

天清浄地清浄、内外清浄六根清浄、うつや梓の音にひかれて、弥陀名号の陸奥守、并に小林よりまませ。より人はいまぞよりくる。なかはまの、あしげの駒に手綱ゆりかけ（明徳記ゆかりの物語性はなお残る）

更に後退させれば呪術行為となる。学生時代、磯貝英夫先生の演習作品で記憶に残るが、長塚 節『土』第十五章に明治の一農村の土俗を写し、老巫女による口寄せを記す。亡妻に未練の残る勘次が死口を巫女に申し出る条を中心に生口や白粉顔の若い三味線警女も記す（生口とは、意中の人など現存人物の胸の裏を窺う行為）。言わば勘次の未練の払拭・心の安定が口寄せの眼目である。（折口信夫は『老岐民間伝承探訪記』に口寄せ女見とおしの存在を記す。これは払拭ならぬ現今将来の悩みに対する呪術行為かと思われ、その類例は和泉式部の悪疾をなおしたと伝える宮崎県国富町の法華岳薬師にも現存する。）

結局、ある意味で説経琵琶歌は、口寄せと舞の間に位置し、呪術靈驗性を遺す。舞はそれをほぼ脱却して文芸的に純化されるがなお祝言性を伴う。夙に平安朝にリアルな写実小説が発達し、後代に呪術文芸あり、時間的新古と純化とは別であり、これらの差異はジャンルなどの問題が関与するものと思う。

幼児の遊戯教育、例えばチイチイパッパなどには国語音楽体育などの諸教育要素が混沌している。昭和8年以降の小学2年国語読本（巻4の18）に外敵と逆臣とを退治した百合若譚を収め、混沌は幼児教育よりも純化されている。だがこれは明らかに舞の省略版ゆえ単純必ずしも原型ではない。

汎話型の原型（鬼退治譚）と一作品における個性的達成としての舞の原型（望郷望京）とは同様に区分けされるべきであり、作者と時代環境と（発達年齢など）享受者の興味要求を考慮する必要がある。

三、舞の物語展開部 世に波風立つ中間部における特色

国常立・イザナギイザナミに始まり、筑紫に陣取る蒙古の国難の後、百合若夫妻の危機とその解決に至る。天の軍評定に、神の戦さを延べ、戦大将に人間を指定する神託が下る。ここに作者の公家朝廷観が見え、次に引く。語りの技法上、舞の享受者が予想だにせぬ語を突発的に出し、意外性を利用して核心となる当該語を舞の享受者の無意識に刻印する方法である。

神侘あつて神はあがらせ給ひけり。☆さて神託に任せて。かねのゆみやを持べしとて。（五三三頁）
神託をうける条はスラスラと連絡するが、実は☆ここに次の一文が位置する。

☆御父の左大臣御子のゆり大臣をめして下向せよとの御説也。神たくといひりむけん又ぶめい云々
享受者に神託と父命は解るが、突如の綸言は享受者の無意識に刻印される。今一例をあげれば、別府兄弟が夫を待つ御台に百合若戦死の虚偽の報告をする条にも前例のない語が突如現れて同様に刻印する。

◎（百合若を島に置き去り、豊後に帰国）別府兄弟うちつれて先。御所様へ参る。御台所は御覧じて（五九頁）
前後の文脈を静かに辿れば別に支障なく、「兄弟、御台のもとへ参上」の意であるが、作者の意図としてここは次に引く◎上京・宣旨などに対応させたものであろう。

（なお、御所様即ち公方將軍との緩やかな解釈は、作品末尾に百合若に將軍職下賜のことがあり、困難である。）
次の例もまた朝廷本位に武士に命令し、治世させる立場であり、舞『百合若大臣』の一つの特徴となる。

◎其後べつふ兄弟打つれて急都へのぼり、よろこびの帰朝と風聞す(内より宣旨、兄弟に筑紫国司を下賜六〇頁) 朝廷観のほか、例証は省略するが仏教観は、室町幕府とともに衰微した禅宗⁸⁾に代わる真言宗であり、神道観(神仏習合・本地垂迹)は略し、武士観をみる。異国退治等は振武の事業であるが、武士に対する振武の気風を鼓舞する例を次に挙げる。

◎弓もやもくろがねにて。ひきてはかへすべからずと、人魚のあぶらをさし給ふ。(五三三頁) 引云々は、弓矢操作上、ゆがえり対策の意であるが、裏には「退却するな！」の意を含むかと思う。

◎ひとつは国家をまもらんため。又は氏子をしゆこせむため。我か氏子く。かたちにかげのそふことく。さきにたつてぞまもらるゝ。(五四頁) 氏神が護っている、氏子よ前進せよの意であらう。

◎大船百余そう。枝舟は数しらず。浦くれうふねかたせふね。惣じてふなかずは八万艘。(五四頁)

傍線部、諸注釈に片瀬と漢字を宛てたり、高瀬の誤りかと注す。瀉舟瀨舟勝たせ舟の振武の語呂かとも思う。因みに「しほう鉄炮はなちかけ」(2例あり 五二・五六頁)は、語呂・縮約による「四方八方(日葡辞書)に鉄炮を放ちかけ」の改変であらう。

説経 七歳で鞍馬に入り、修行、十五歳で下山、ここに輝日の前あり(4御山人の段)。輝日の館に密かに忍び、契を結ぶ(15歳と14歳 5忍の段)。二人の婚礼挙式が判明し、父将軍が憤り、その時、内裏に光り物あり。その正体は鯨満国の鬼と判明し、百合若出陣す(6勅定・暇の段 異説に鬼国即彦岐との童話あり 折口信夫)。

忍びは、好き同士の事前婚、所謂ヨバイであらう。加えて親に無断の挙式が父将軍を憤らせたか。言わば誓が有能か否か、鯨満国行はその試練であり、その意味でなお試験段階の結婚と判断される。舞の結婚は然るべき履歴の後の正式のものであり、憤りの介入する余地はない。(舞説経との比較上、一寸法師の巣立ちが注意され、これにも憤りの要素がある。一寸法師は無類の豆助ゆえ親に疎まれ、親元を立てて御腕の舟で上京し、奉公先で豆助が姫

に何して誤解から父が姫を叱り、姫の処分を豆助に任せ、二人は家を立って鬼が島云々。親元と奉公先と二度の自立を言う。姫にとっても自立であるが、姫の活動は舞ほど前面に出ない。)

舞 蒙古合戦に一旦勝利し、再度、蒙古退治を命ぜられる。その際、九州現地に在国せよとて豆助同様、御台所と二人して豊後の国府に下向することとなる。これが御台の難儀の原因となる(彼女は在京すべきであった)。

再度の勝利後、油断した百合若を島に置き去りにした別府は御台に手をのびし、旧臣の娘が御台の身代りに犠牲死云々と波風たつ御台の動静を記す。この間、筆硯・食事・夫の帰国を祈る御台の宇佐宮願書など、作者はかなり彼女を酷使し、ウエイトをもたせる。すなわち説経や一寸法師に比べ、御台の前面押し出しが目立ち、和歌ではないが、水の流れが二つに岐れても再び合する幸若中間部の構造である(冒頭祝言・展開分流・終結祝言)。

百合若は彦岐の漁民に助けられて帰国。旧臣門脇に仕える。ある夜、百合若は門脇老夫婦の夜語りを密かに聞き、門脇の娘の犠牲死と御台の生存を知る。犠牲云々は前掲小林氏のお言葉を拝借すれば「一ひねりした趣向」である。犠牲の女性を豊後国志卷4は百合若の娘(相伝、昔者百合稚者有女、名万寿姫、為賊所殺)と伝え、徳治元年、大友貞親が万寿姫ゆかりの旧寺地に寺(仍旧号、称万寿寺)を興したという。住僧百余口を数える大寺院であるが、蒙古関係者供養や海外交渉・北条の政策による合戦後の大友氏の財力増大を抑止する意義をも含んだかと思う。

(臨済宗豊後蔭山万寿寺の創建は、北条貞時による大友貞親への示教・臨済宗肥前京都鎌倉各万寿寺・肥前河上神社との脈絡・蒙古合戦軍功恩賞地・朝日さし夕日輝く伝承その他から説くべきがあるが、歴史方面ゆえ略す。大友記所見の百合若イ註記・博多承天寺史(統)ほか仏教関係諸書)

文学に限り、豊後国志を比較の基準とすれば、構想上、不慮死の娘を妻に、更にこれを旧臣の娘に変更、作者は、妻女略奪の文芸趣向と君臣封建道徳の強調とを併せ考えて脚色したかと思う。

真相を知った百合若は門脇の前に名乗らんとしたが、しばし、時節をまつ。その年も暮れて、正月を迎える。

あら玉月にもなりければ。九国のさいちやう弓のとうをはじめ(イめて 動詞)。別府殿をいはふ。(70頁)
弓云々は、字句が短いために、弓初めを開始して(儀式)の意なのか、それとも弓の頭以下(人間)の意か判別し難い。諸註も難儀の模様である。「(正月になつて)九国の在庁ども、弓の頭(弓太郎)をはじめとして、弓初めを開始して、別府云々」とあれば解り易い。儀式と執行者とを重ねて縮約するが如き表現である。私は動詞に注意して儀式の意に解したい。弓の日は注釈書に朝廷正月十七日云々とあるが、これは夙に廢れた。鎌倉室町の武家も基本的には同日であるが、その実態は区々であり、対馬宗家の弓始めは5日(対州編年畧卷2)・山口大内氏の御弓初は11日(大内氏実録卷12志1)である。武田文に「一月七日の競射会の日」とあり、舞の弓矢の場面には正月の祝いの雰囲気があり、松の内(7日おそくとも15日以内)のことと思う。ちなみに朝廷における幸若舞の初上演は市古貞次博士ご作成の幸若舞年表(国文学研究資料館紀要第5号)によれば毎年正月五日がほぼ定例である。百合若の悪口ゆえ「ならば汝射よ」と別府が命じる。宇佐八幡に崇め置く百合若遺愛の鉄弓を引きしぼり、ここに名乗りをあげて降服させる。これは別府を魔物に見立てた正月の破魔矢の図である。なお、百合若遺愛の弓は武田文によれば大分市の由原八幡宮に遺るといふ(由生原・柞原 イスワラ・ユスハル等ウムラウトの如し)。

四、舞の作品末尾・祝言部前後における特色

百合若は別府を処断して御台に再会。恩に報じて壹岐の漁民に壹岐対馬を、門脇翁に筑紫九ヶ国の政所を与えた。さらに都本位の改作かと思うが、本地物の名残をのこしつつ翁の娘と鷹の供養それに上京親子再会等をこう語る。

◎舞の終末部(翁の娘のためにママナウが池の辺りに寺院を、鷹の孝養に都の乾に神護寺を建立)

鷹のためにたてたればさてこそ今の世までも。たかお山とは申也。大臣殿の御誕には。つくしに住居を。する

ならはものうき事もありなむと。御台所を。引くして都へ上り給ひけり(父母に対面、参内す。御門叡覽あり)

日の本の將軍になさせ給ふぞありがたき。扱こそ天下太平。国土安全。寿命長遠なりなりとかや。(72頁 終)

説経 笠懸に別府の兄を捕縛。六条屋形に赴いて名を名乗る。將軍は百合若を日本の將軍とする。別府を処断し、漁民らに賞を与え、再び鯨満国に渡り、これを日本国の島とする。最後に百合若は88歳で豊後由原八幡に垂迹し、輝日前は87歳で肥前河上神社に垂迹。鷹を助けた比茨童子は手長男神社に、鷹は玄海島の小鷹大明神に垂迹した。(すなわち四社の本迹を説き、家内安全息災延命云々の誦文に、第10段、神に勧請の段を語り了る。)

手長男神社は壹岐郷ノ浦町物部田中触のそれか。百合若への魚介等の食事、手長膳部奉仕の功かと思う。郷ノ浦のちなみに幸若舞(大織冠・信田・笛巻)所見の「もとおり」(注釈書に未詳)は、海東諸国記(地図)に毛都伊浦(岩波文庫

田中健夫氏の注に本居付近)、山口麻太郎著『壹岐島民俗誌』(地図)にもとる、壹岐郷ノ浦の入港地付近である。

本居は佐賀県本告文書(瀬野精一郎編『肥前国神埼荘史料』298・300号)より異体(牛・口)や吉田東伍編『大日本地名辞書』などにも見え、その発音は本老に近い。

玄海島は舞にも見え、合戦場が日本と大陸の潮境チクラが沖ゆえ位置的に博多湾頭の玄海島を訝しむ註がある。

この島は糸島郡志摩町北端蒙古山の東北約3軒の沖にある。蒙古合戦に少貳覚恵と大友頼泰は大将として出陣し、その退却の姿を筑紫本八幡愚童訓は、あちこちヨリヤスんだとか恥をカクエなど落首するが、頼泰は軍賞として筑前怡土庄志摩方三百町物地頭職を与えられ(同史料50号)、少貳大友両氏は在地の地頭級武士への恩賞たる神埼荘の田地分割配分(武士二人につき全て十町以下)に關与している(同52号)。

室町時代、大内が博多を切り取り、大内大友和睦成立後も故地を大友に返却しづる例もあり、大陸通交上、この付近は重要地域である。筑前国統風土記卷28に「志摩郡も、中通りより奥の地士は、とく大友方なりければ」云々、同卷28の諸所に大友配下の城などの記載あり、大友の領有關係から島に鷹の神社を勧請したのではないかと思う。

鷹については神護寺玄海島以外に九州圏内に筑後山門郡鷹尾など適地があるが、舞が都近くとしたのは知名度と中央志向の結果であろう。(適地の件は、頼泰や大友能直の七男秀直(鷹尾七郎)の故地・近世唯一残った大友系大名筑後立花氏・柳川市三柱神社鷹尾文書^⑩がらみで筑後瀬高大江に舞が伝来する事情につきあたるかと思う)

舞説経と本地物の末尾とを次に比較する。本地物の一般的な型であるが、熊野本地の場合、本地譚に神仏の人間修行時代の苦難を語り、しかじかの理由から天竺マカダ国から別の地に場所舞台を移す。(以上本地譚・以下垂迹譚) 日本に飛来して熊野の神と現れて祝われる。垂迹神の本地仏はしかじかと諸仏の名をあげ、神は庶民を救う、よくよく信仰せよ。これがその定型かと思う。場所の変化・人より神への格変化・本地仏の付与、この三点が本地物の条件かと思う。私見では古典的本地物ほど本地譚と垂迹譚との接合部の切れ目がシャープである。

(天竺↓日本熊野。厳島本地は天竺↓シャガラ国↓四国↓厳島に垂迹。諏訪本地は切れ目が更に緩く曖昧である) 舞説経ともに場所移動あり本地仏なし。舞は、接合部直前に寺院建立あり垂迹神なし、僅かに本地物の残滓を遺す。説経に垂迹神あり仏なし。仏を語り得るにも拘らず、仏を更には場所移動の経緯を語らないのは、庶民の信仰を要請する本地物とは異なり、説経巫女の家内安全等の祈禱に主眼が移行したためであろう。

舞は、公家朝廷本位に百合若將軍就任を垂迹部相当の祝言に語りおさめる。説経の語りは、内裏なる語もあるが、全体として九州圏内に止まる。百合若遺愛の弓を伝える豊後田原八幡(武田文)が豊前宇佐八幡へ、玄海の鷹が都近くの真言宗高雄山神護寺へと変化するのは、一部前述したが全国的知名度に基づく国家・都本位の改変かと思う。(なお、池は蔭山万寿寺(蔭はマコモの意)辺りの池の残滓とも思うが、弘法大師満農池への意識ありと判断する)

五、結びにかえて 百合若大臣における望郷(望京)

山国信州の諏訪本地がより低地へ低地へと向かう陸の文芸であるとするならば、百合若は海(水)の文芸である。前記小学国語読本を除き、その諸伝承に共通する眼目は「帰りたい」という思いと判断する。その趣きは微妙にして①波間に疲れた舟人は地面に、②孤島の民はより広い地に、③地方滞在の貴族文化人は都に等々さまざまであり、さらに広くは海難者の口寄せを願う家族の思いもまたこれに類するかと思う。具体例を次にあげる。

諏訪本地の例から判断して音声語りならぬ後の加筆と思しき箇所が舞にある。

①大臣殿は此ま、御帰朝あるならば。めてたかるべき事共を。此間の長陣にせいきをつくさせ給ひ。めのとの別府をめして仰けるは。いづくにか嶋やある。(五七頁 傍線部全文削除可。慶すべき表現であるが、筆者は、帰るべき母港の途中で気をぬいた百合若を、諏訪同様、間接的に批判しているのである。)

②小玉正任氏は前掲書に沖繩県宮古郡水納(ミンナ)島の百合若伝承を口碑・雍正旧記など数種紹介されている。昭和51年12月、百合若の鷹の墓調査の時か、人口は昔二百五十人以上、今は八人の由。伝承される鷹は、秋に宮古島地方に飛来して南下する渡り鳥、鷹の一種サシバかとされる。ご研究に教えられ私見を加えれば、琉球地方伝承の特色として大和人漂着・飛行自在の鷹への憧れ・飲料を雨水に頼る自給自足の生活・勤勉の強調(百合若大臣ユイアカデーズは日中寝ころぶ怠け者の意)をあげたい。人口の減少は、生活の不便が一因か、島外移住を意味する。島を出たいとの思いは実は帰りたいと表裏一体である。ちなみに瀬戸内海の小島から南米大陸に移住し、信州から満州に移住した人も多いと聞くが、これも同様の憧れに起因するのであろう。

③武人振武の舞の気風を前に見た。一見、これに矛盾するかに見える都の公家の立場になるやや気弱の風も見え。すなわち帰りたいとの思いである。これは、武士を支配しつつ全国を平和裏に統一、言わば文よく武を制し、昔を今になすよしもがなとの思いに通じるものと思うが、舞の特色として殊に意味深長の箇所を次に引く。

◎(御台自殺決意を乳母制止の条)御まぼり刀をうばひとり申し。尤御道理にて御座ささらふ。三条みぶの御所

よりも。必御むかひの参さふらふへし。命をまたふし給へとかくなだめ奉る。(61頁)

◎(鷹緑丸が島に飛来、百合若御台を偲ぶ条)などことつての文はなきそ。豊後にいまたましますか。都へかへりお上りか。ふちは瀬となるならひかや(62頁 右二例は地方下向の公家の娘が実家に帰る意と思う)。

豊後大友の右の類例は史料を見ないが、山口の大内義隆の正室貞子の帰京の例はある。万里小路内大臣秀房の女貞子は義隆に嫁いで下向したが、二人の仲は異腹の子の誕生ゆえか疎遠になり、離婚して帰京している(大内義隆記他)。都の実家が地方下向の身を案ずるケースも想像可能であり、視界を広げれば、百合若が九州下向をし、九州在住は物憂しとの帰京にも通じ、言わば戦時中の学童疎開にも似た応仁の乱前後の公家文化人の山口下向なども軌を一にする。「内裏モ公家モ門跡モヲトロヘサセ玉ヒツ」。適々残ル住家ニハ葎茂リテ門ヲ(同記)閉る生活難ゆえの下向と思う。特に土地をめぐる公家と武家の関係は肥前神埼・筑後鷹尾の例からも根本的に矛盾し、武家はつねに公家領を切取ってゆく存在であった。(公家文化人等の地方豪族滞在は更なる矛盾である)

天文廿年九月一日、長門深川大寧寺の義隆自刃に對外貿易に富貴した大内は滅亡した。事前の陶謀反の風聞をよそに八月廿六日、足利義輝より上使あり、豊後大友義鎮よりも使あり、水陸の珍肴・金銀の饗膳、日夜の酒宴、「小太夫ト云幸若カ、リノ舞ノ上手有ケルニ志田烏帽子折ナト舞セラレケレハ、皆人舞聴聞ニ貪著シテ合戦スヘキコトハ打忘レ」云々(陰徳記卷21)は、舞の役割を考える上で見逃し難い例である。米原正義編『大内義隆のすべて』によれば饗應・遊宴の費は領内庶民被官の増税に依拠したという。つるる不満と陶の謀反、富貴の地方豪族が言わば一朝にして上下の矛盾に潰えた観がある。守護大名より戦国大名へ移行する秋、地方を平らげ上京する百合若の姿に、舞の役割、文よく武を制する公家の祝言の芸能としての機能を見るものである。

補遺 地名の註を中心に

◎ちくらが沖 注釈書に未詳、松本隆信『御伽草子集』(新潮日本古典集成)の『浄瑠璃十二段草紙』(二七頁註16)に朝鮮巨濟島云々、『日本国語大辞典』(小学館 1982年)筑羅ちくらの項にも諸文献を引く。対馬宗氏が朝鮮王より米穀の禄を食み、秀吉が朝鮮征伐の功に巨濟島を宗氏に与えた例(宗家文書 1597年)、終戦後、李承晩大統領による対馬の韓国領有を主張の例もあるが、筑は筑紫との右辞典の指摘に従えば、「和漢ませこぜ」の軽侮の意を含み、琉球におけるヤマトンチュ・ウチナンチュの逆の意味で老岐対馬の人々の使用自体やや問題となる。ちくらは中央における舞時代の導入であろう。ただし、ませこぜ状況は存在する。単なる唐名かとも思うが、太祖・定宗・太宗・世宗実録(14~15世紀前半)に朝鮮交易の和人の名が「老岐」上万戸道永万戸多羅古羅上万戸藤九郎・「(対馬)万戸早田万戸守助丞万戸三未多羅」などと見え、海東諸国記(1471)になると万戸なる中国風の名が見えないのである(万戸の用例 幸若『大織冠』、『古事類苑』外交部5所載の北史94(航路 百濟・竹島・耽羅国・都斯麻国・一支国・竹斯国)にもちくらに類似する語が見えるが、舞自体文芸であり、特定地点よりもむしろ日朝間のやや広い水域を考えるべきかもしれない。

◎周防の国にさしかり、おうちのこほり朝倉や。極楽市と聞かからに立留りてそたつねける 幡磨の国に入(九四頁) 右『信太』(東洋文庫)は荒木 繁氏の註に「吉敷郡に大内の地がある。ここか。」とあり、同感である。大内氏壁書に長門吉田郡と筑前御牧郡の二つの私郡が見え、下関市史年表編(1978同市役所刊九六頁)に吉田宰判館跡の写真を載せるが、時代的に毛利氏以前と思われる大内郡なる呼称は私称私郡の類か否か不明である。

朝倉(同註未詳)は陰徳記卷21に「義隆卿ハ法泉寺ヲ出給テ糸伊根・朝倉・大坂ヲ越、八小路ノ谷ヲ足二任セテ落行給フ。(中略)深川ノ大寧寺」云々とあり、山口市内の現存地名である。糸伊根は糸米か。山口県文書館の陰徳記(三卿伝 写本)の該当箇所ルビは無いが、版本陰徳太平記卷19には繁雑にルビをふり、寧にネイとルビす

る(通俗日本全史活字本も同じ)。学生時代の質問に友久先生より「それはボウケンキとも云うよ」と示教された棚守房頭手記に義隆落を「長門先崎ニテ小舟ニ(中略、舟を戻して)対念寺」云々と記す。長門市仙崎を瀬戸崎(またはセン・千)とする文献は多いが、先崎は初見であり、対念寺も同様である。私の幼時の耳では明らかにタイネンジである。ちなみに長門市史民俗編(同市役所1979)の方言調査の談話に「タイネンジ」(九一八頁)とある。房頭は聴く傍ら宛字交りに筆録したかと思われ、場面が彷彿される。宛字ではあるが発音は現在に一致する(金子・稲賀先生翻刻の野坂本物語にも房頭の宛字があったと記憶する)。極楽市は同じ註に「未詳。極楽寺か。安芸国」云々とあるが、「たつねける」までを一文とみれば、至極楽市の意とも解されよう。楽市楽座の如き活発な商業活動であり、大内の町の雑踏に信太殿を探す意かと思う。

◎舞の展開部の冒頭付近に夷三郎と出雲大社のことを説く。前者は源平盛衰記巻9宰相丹波少将を申し預る事に見え、後者、社数の増減をも含めて出雲大社を総社とする理由は謡曲大社に明らかである(神無月のその一時点、八百万神参集)。ほかに御台の宇佐願書(花のみゆき65頁)宇佐は僻遠地ゆえ御幸は難儀にして事あれば宇佐使が立つ。花云々の註、ここは御役即ち課役を賦課して豪華なイベントを執行せしめるの意かと思われ、咲く花は連想されない。など註すべき箇所、山口麻太郎前掲民俗誌所見の吉岐の風あげのことなど考察すべきもあるが、紙幅の都合で省略する。

註(1) 『神道集説話の成立』第2編第5章 諏訪縁起・甲賀三郎譚の原態(P310〜347) 東京・三弥井書店・1984

(2) 『説話とその周縁(物語・芸能)』(説話の講座6)所収(P305〜327) 東京・勉誠社・1993

(3) 『幸若舞曲集 全二冊』(京都・臨川書店・1974)

(4) 毎日新聞社発行・1993(7水納島の百合若大臣 P155〜168)

(5) (歴史のロマン)『日本伝説の旅』(25頁) 文芸春秋デラックス 第2巻第13号 1975・12

(6) 東京・角川書店・1969(P467〜484)

(7) 山口・山口県教育会編集発行・刊記なし(あとがき1976)・ふるさと叢書Ⅱ(P303〜308)

一説として真言宗明王山広福寺中山観音の腰が曲がった由来をなげなげ話(Why so Story)盛俊が観音様を蹴飛ばし・朝日さし夕日輝く云々)風に挙げる。作家古川 薫氏に「黄金の雄鶏(霜降山に埋めた厚東氏の財宝)」と題する宇部市在住の厚東氏子孫の取材にもとづく文がある(歴史読本 22巻13号P60〜71 1977・10 新人物往来社)

(8) 玉村竹二著『五山文学』(日本歴史新書 東京・至文堂・1955)第8章五山文学の変質と衰頹 参照

(9) 筑紫頼定編(東京・泰東書道院出版部・1942 下62頁)

(10) 熊本中世史研究会編『筑後 鷹尾文書』(熊本・青潮社・1974)鷹尾家は筑後立花氏ゆかりの柳川三柱神社神主家(11)室町時代物語集第二所収の兼家系諏訪本地(27)水谷不倒氏旧蔵本「又あなへ入給ふ」の直後)

「其まゝすておき給ふならば、めてたかるべきに、ふかきおもへのたねとは、のちにそおもひあわせける」(51頁)最初の穴入に止めておけば穴底に残される事態は生じなかったとの筆者の心が反映している。この記述は、兼家系の古態になく、前後の叙述を連絡緊密化する。

(12) 御園生翁甫著『防長地名淵鑑』(徳山・マツノ書店・1974)に詳しい。

追記 提言ながら、音声語りものの本文注釈は実演現場主義にて一聴即解。ごく短い註が必要かと思う。以心伝心、「ことの数にて数ならず」を「星の数に余る」と私が註するのはオーバーかとも思うが。

中世伝承文学とその周辺

平成9年3月31日 発行

編集者 友久武文先生古稀記念論文集刊行会

田中 瑩 一
西本 寮 子
山内 洋一郎
故 湯之上 早苗
横山 邦治

発行所 株式会社 溪水社
広島市中区小町1-4 (〒730)
電話 (082) 246-7909

ISBN4-87440-452-9 C3095

友久武文先生古稀記念論文集執筆者一覧

(1997. 3. 31現在 50音順)

- 浅野 日出男 (山陽女子短期大学教授)
井出 幸男 (高知大学助教授)
小野 恭靖 (大阪教育大学助教授)
佐々木 聖佳 (関西外国語大学短期大学部非常勤講師)
下仲 功一 (智辯学園高等学校教諭)
白石 一美 (宮崎大学助教授)
須田 悦生 (静岡県立大学短期大学部教授)
竹本 宏夫 (広島経済大学教授)
田中 瑩一 (島根大学教授)
友久 武文 (広島文教女子大学教授)
永池 健二 (関西外国語大学教授)
西 和子 (広島文教女子大学附属図書館司書)
西本 寮子 (広島女子大学助教授)
馬場 光子 (杉野女子大学助教授)
藤井 昭 (広島女学院大学教授)
古田 雅憲 (広島文教女子大学助教授)
真鍋 昌弘 (奈良教育大学教授)
宮岡 薫 (甲南大学教授)
森山 弘毅 (釧路公立大学教授)
山内 洋一郎 (奈良教育大学教授)
山口 眞琴 (兵庫教育大学助教授)
渡邊 昭五 (大妻女子大学教授)
森下 弘(題字) (広島文教女子大学教授)

友久武文先生古稀記念論文集

中世伝承文学とその周辺

友久武文先生古稀記念論文集刊行会編

溪水社